制裁

吉田武雄

ときおり真夏の熱風が窓から吹き込み、ほこりが舞い上がっていた。鋳物の半製品などが乱雑に置かれた工場の二階が昼休みの休息所になっていた。

戦争も末期になって国民学校高等科一年（今の中学一年）の私達までが長岡市の北部にある大阪機械製作所蔵王工場に動員された。あとで分かったことだが長岡中学や長岡工業など中等学校の一、二年生は学校で勉強していた。

私達は数人ずつ道具場、検査場等に所属してリヤカー等を使って物を運ぶ雑用が主だった。

大人びた少年が、五十人ほどの同級生にむかって演説していた。

「ヒトラーやスターリンの独裁は……」と叫んでいた。詳しいことは分からなかったが、自分もそんな風にクラスを指導するという内容だった。

突然彼らのなかから二人の生徒がみんなの前に立たされた。演説していた少年の提案が受け入れられたからである。沈黙の支持だった。

ひとりの顔をみてギクリとした。二つ年上の隣家のSさんだった。長岡商業学校（当時は長岡第二工業学校といわれた）三年生だった。

その二人に制裁を加えるという提案も前と同様に静かに承認された。

二人は少し間をおいて立った。同級生の一人ひとりが、軽く握った手で左、右と頬を殴るのだった。そのたびに鈍い音とともにSさんの顔が左右にゆれた。

数日後、やっとSさんにそのいきさつを聞くことができた。

「なあに、あいつがヒトラーとかスターリンとか言っておかしかったから隣の友達と顔を見合わせてくすっと笑ったのさ。それが見つかってああなったんだ。なかには〝オス〟とかいって軽くたたくのもけっこういたんだ」

「あの人は、級長なのですか」

「まあ、そうだな。そんなものさ」

「すごく年上に見えたけど」

「ひとつくらい上かもしれないな」

国家によって動員され、管理された労働の場に、クラス毎の自治があり、小さな「独裁者」がいたのだと思う。

その工場は、長岡空襲にも焼かれずに戦後も長くその地に操業していた。

Sさんは、長岡商業高校を卒業し、H商店に勤めた。Sさんとは工場での出来事は二度と話さなかった。

（よしだ　たけお）